島根県立図書館報

圖書館たより

号　数　第68号
発行日　昭和60年3月15日
編　集
発　行　島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL(0852)22−5725
印　刷　渡部印刷株式会社

子供の読書の奨めに思う

島根県図書館協議会委員　中本辰夫

県民の読書普及をめざして多角的な活動を続けている県立図書館の事業の中で、とりわけ子供の読書奨励についての近年の実績は目を見張るものがある。市町村教委と連携した親子読書の活動では全県下の幼稚園と保育所の90%を組織化している。こうして幼児たちに定着してきた読書の興味——習性を継続的に発展させようと59年度からは、小学生を対象にした子供文庫を地域に開設して、学校とボランティアの指導員が協力しながら有効利用に努めている。子供に対する「読書の奨め」は、生涯学習の素地を培う一つの有効な方法であるとともに、読書の習性が強まるほど行き過ぎがちなテレビ、マンガの視聴も自ら是正され、より良い子供を育成すべき今日的課題にもつながってくる。子供読書の普及面で後発地域とされてきた島根県がここ数年来の指導奨励で急角度に水準を高めていることは力強い限りである。

この際、ろう（隴）を得て蜀を望む感はあるが、学校教育の場で読書の奨めを一段と強めてほしいことである。それには教材費における図書購入費の増加と効率的な活用や学校司書の必置制の実現など条件整備に努めることのほか、何としても児童、生徒の読書習性を培うための熱意ある配慮を望みたい。その点で私は秋田県で刊行した生涯教育についての県民の提言集の中から感動的な示唆をうけた一文が忘れられない。それはある学校長の実践報告であるが、その記述によると——生涯学習の素地を培うため**①読書の奨め②意欲を高め、喜んで立ち向う学習③自由研究のすすめ**——を3本柱に生涯にわたる自己学習を育てることを学校営為の中に位置づけ、その第一である読書の奨めについては朝の20分を全校の同時読書時間にしているというのである。

「毎朝8時20分から20数分間は、学校の中に人なきが如く、林のような静寂さの中で、ひたすら読みひたる児童1900名。この一斉読書時間を楽しみに待っている者が半数を越える……」と伝えている。子供の読書意欲の深まりは家庭での学習意欲を高め、さらに、家族をも刺激して親子ともども地域の公立図書館の利用者も増え続けているようである。

島根県内でも安来市十神小学校で短時分の全校読書時間が行われているし、各地に波及しているようだ。少年期は生涯にかけての〝学ぶことを学ぶ〟かけがえのない年代であり、生涯学習の理解を身につけるさまざまの教育実践が広がるように期待したい。

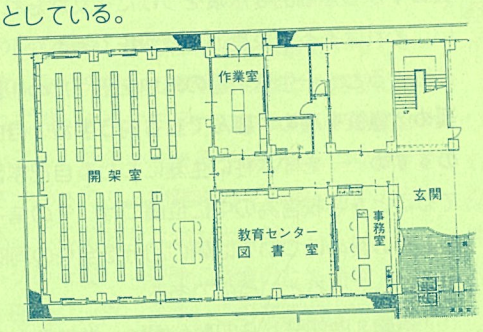
―昭和60年度事業―

西部読書普及センター（仮称）の設置

石見地方（浜田市長沢町）に待望の県立図書館読書施設が、昭和61年４月オープンの運びとなったので、その概況を紹介します。

県立図書館は本県の東部に位置しているため、西部地域については距離的に不便をかけていた。当館でも長い間の懸案であったが、このたび、やっとその夢が実現することになった。

建物は現在建設中（本年１月着工）の石見教育センターに設置し、今年10月には完成の予定である。したがって昭和60年度は図書の購入整備等諸準備を行い、61年４月１日開設し、次の事業を推進することとしている。



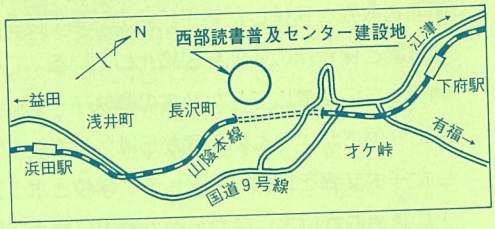
1．県西部の市町村図書館や読書施設に対し、必要な資料の貸出援助を行い、読書普及活動を促進する。

2．県西部の市町村が親子読書、子供読書、成人読書等の活動を活発におしすすめるよう指導援助する。

3．県西部の市町村が地域文庫や配本所の設置に努めるよう指導援助する。

4．県の移動図書館車巡回のための図書資料補給基地として、常に相当の図書資料を整備し、巡回地域への貸し出や読書活動の推進に努める。

以上の業務を職員３名で行い、蔵書数は３年計画で約４万冊を整備する。なお個人貸出は行わない。



コンピュータ導入計画

現在館内用図書が約20万冊あり、毎年約８千冊ずつ増加している。これら大量の資料中に含まれる多様な情報を、的確かつ十分に利用するためにはどうすればよいか。つまり当館がめざす島根県における資料・情報センターとしての機能を十分に発揮するには、いかなるシステムを作成したらよいか。このことがコンピュータ導入が問題になった当初からの懸案事項であった。

コンピュータ導入に向って　当館がコンピュータ導入について正式な方向づけを行ったのは、島根県立図書館協議会の答申を受けて昭和54年に策定した「島根県読書普及振興計画」においてである。54年頃といえば、図書館の電算化は全国的にもまだめずらしく、主として大学或るいは研究所等でやっと本格的に稼働し始めたばかりで、公共図書館においては、都市部の少数の市立図書館が貸出業務を中心に、しかもカナ処理で行っているという状況であった。

導入のための準備開始　この様な中で館内で電算化プロジェクトチームを組み、プログラム研修をベースに研究会を積み重ねたが、56年度に研修調査費が認められ、国会図書館、広島大学、大津市立図書館等を視察できたのは、電算化計画策定にあたって非常に有益であった。59年度には国会図書館の目録情報であるジャパンマークを購入することができ、図書館各業務の中核をなす資料目録情報のデータ入力の効率化をめざすことができた。

新年度の導入作業　60年度はこの目録情報作成のためのシステム設計を行い、実際に目録情報を入力、蓄積し、このデータを利用して、59年度受入の蔵書目録作成という一連の作業に入るが、そのためには設計したシステムが十分に有効かどうかテストする必要がある。このため年度前半にテストを重ね、システムを確定し、以後の電算化業務の基盤を確立することが緊急の課題である。

当館の電算化業務は60年度を基点として、以降64年度本稼働に向って、目録情報の大量データ蓄積、貸出、情報検索システム等の諸システムのトータルな開発、並びに電算機器導入とスケジュールが進んで行くことになる。

「親子読書」「子供読書」の課題と問題点

昭和54年度からスタートした「親子読書モデル指定事業」も現在の第３期指定７町村（玉湯・頓原・美都・旭・西ノ島・海士・知夫）の終了年次（S60）をもって一応終了します。以後は各市町村独自の主体的、恒久的な活動にゆだねられます。

「親子読書」の芽生えを育てる発展的な新事業として「子供読書モデル指定事業」が本年度（S59）より新しくスタートしていることは既にご承知のところです。県立図書館では、年次対象年齢をあげて生涯教育の柱に……という遠大な読書普及活動の展望に立ってこれら普及事業をすすめています。近年「青少年健全育成」の柱に親子読書、子供読書活動を位置づけて、次代を担う人づくり、村おこし町づくりの長期構想をめざす市町村が多くなりつつあることは喜ばしいことです。

過日実施された「市町村読書普及研修会」（出雲部2/4、宍道町　石見部2/6益田市）の話題の中から現状と問題点をとりあげてみました。

親子読書 ―定着を願って―

●継続的な研修活動・担当指導員の位置づけ

モデル指定事業満６年を経過した現在、県下殆どの市町村で幼稚園・保育所総ぐるみの活動として自主的な実践活動が根づきつつあります。特に家庭における定着は家族の協力、とりわけ父親の協力が大きな決め手になるようです。教委・幼保の先生方の積極的な熱意と努力、担当指導員のふだんの啓蒙活動の賜と敬意を表します。

この事業の困難性は、毎年子供も親も新しくなるので導入研修を毎年設けて、「親子読書」の必要性を納得の上実践活動に取り組まねばならないことです。町村によっては「入園式」とか入園前、入園後の保護者会等全員が揃う機会に位置づけて効果をあげています。

●読んでやらない親をどう啓蒙したらよいか

「読み聞かせがすむと、“ああいいことをしたな”と親自身がとても満足します」という親がふえる一方で「この忙がしい時に本なんか読んでやるような暇はない」と子供に目を向けようとしない親がどこにも少数は必ずいるようです。「こんな親はどうしたらいいでしょうか、子供がかわいそうで……」と幼・保の先生方の悩みです。答はひとつ、「子育ての責任」を自覚してほしいということです。幼児にとって肉親の肉声ほど神秘なものはありません。椋鳩十先生の言をかりると「夜ねる前の読み聞かせは心のお夕飯です。たっぷり食べさせないと夜中に『ひもじいっ』って泣きますよ」ということ。落ちこぼれ親が出ないように園ぐるみ、地域ぐるみの連帯力で育てていただきたいものです。

●親子読書を核に　町ぐるみ読書活動展開中

頓原町では、親子読書モデル指定２年目の今年、新しい読書普及計画のもと意欲的な活動が展開されています。これは幼児の読書への芽生えをぜひ小学校でも継続させて、というＰＴＡ研修部の呼びかけを教委が「新しい町づくり」の構想に位置づけたもので読書普及の理想像でもあります。

（ふれあい12号親子読書、子供読書実践紹介参照）

子供読書 ―読書の一連の育ちを願って―

１．ねらいと組織

子供たちは、幼児期に親子で絵本にふれあい、みずみずしい情感が育ってきています。子供たちをよどみなく、自立したひとり読みへとつないでいくためのステップとして、子供読書を位置づけ、「子供読書会」の育成を考えています。

この活動は、地域ぐるみの異年齢集団における読書を媒体にしたふれあいを意図し、３年～５年の児童15名ぐらいを１グループとして編成します。このグループは、県図から15冊セットの本を借りて毎月１回読書会を開きます。同じ本を私も読み、友だちも読み、みんなで語り合う仲間読みの中で、一人では得られない読書の喜びをもたせたいと願うのです。

２．モデル指定地域の取り組み

今年度第１期モデル指定は、東出雲、大東、吉田、桜江、邑智の五町村です。それぞれ町村の実情に即した計画で活動が進められています。いずれも、教育委員会を中心に指導員、親、地域の人々の理解と協力の中で着々と成果が挙げられています。

地区	グループ数	文庫数	指導員数
東出雲	4	4	10
大東	5	9	3
吉田	1	2	2
桜江	5	5	20
邑智	3	3	2

３．子供読書の推進力

子供読書を推進するには、常に地域の子供たちに接しながら、仲間読みの橋渡しをする指導員の方々の熱意とアイデアに負う所が大です。指導員は、子供たちが家庭で本を読み温めるためのてだて、読書会での喜びを見出すてだて、本の選択など、山積みする問題解決の方途を相互研修で模索しながらの取り組みです。「子供一人ひとりが主役になる場を設定してやることこそ重要」と指導員の声。子供から出てくる活動の芽を随時すくい上げ興味づけるアイデアこそ鍵です。今、指導員の確保が重要課題です。

川津公民館

母と子の図書室雑感

松江市西川津町　大　淀　よしえ

「こんにちは！おばさん、この本おもしろかったよ。弟に読んでやったらおおよろこびしたよ。」
「今日はどんな本を借りてゆこうかな？」
ここ川津公民館母と子の図書室は元気な子供達のたまり場となっています。

昭和50年に今の公民館の倉庫を改造して、図書室に変身したそうです。当初は、 200冊余りの蔵書数で出発したようですが、現在は寄贈本を含め約1200冊程になりました。公民館に図書室が設置される経過として、「親子読書」の活動がとても熱心に行われ、その読書活動が推進力となって、現在の図書室に発展していったそうです。私は図書室に関わってまだ数ケ月ですが、図書室と子供達の様子を書いてみようと思います。

毎週水曜日と土曜日の午後開館（２時～５時30分）しています。貸出冊数は、一人３冊までで貸出期間は一週間を原則としています。学校の授業が終った放課後、借りていた本をいっぱい持ってニコニコした顔で集まってきます。中には、同じクラスの子供達がグループになって通ってきます。図書室を待ち合せの場所に指定している子供達もおり、本を選びながら学校の出来事や友達の事など楽しい会話をしています。ちょっとした子供達のサロンに利用されている感じです。自分の借りる本の他に、弟や妹の本も選んでいます。

「私の弟は、今のりものに興味があるんだ」「私の妹は、バーバパパのシリーズや小さいモモちゃんが好きだよ。」

子供は適書を知っているようです。自分の眼で興味や関心のある本を選びます。私は側で黙って見ているだけ、余計な口出しは禁物です。

常連の子供は、本の返却の仕末も自分できちんとできます。ネームポケットからブックカードをとり、ブックポケットにおさめます。そして、もとの位置に返します。混雑している時などテキパキと私のお手伝いもすすんでやってくれます。特に女子は喜んでやりたがります。頼もしい未来の図書館利用者として成長する事を願いつつ、大いに彼女達に働いてもらっています。

月一回の紙芝居と本の読み聞かせは、ふつう土曜日の午後に行います。お天気の良い日は、外に椅子を出して昔ながらの紙芝居のおばさんになります。子供の数は、その月によって様々ですが平均12～13人位です。最初に紙芝居で、こちら側に集中させます。気分が乗ってきたところで大型絵本を読みます。最後に物語の読み聞かせをして終ります。約40分位の時間をかけています。余り長くなっても効果がないようです。物語は、一回で完結するものが好まれます。

先に述べましたが、この図書室は倉庫を改造したもので読書環境としては適しておりません。

書棚の高さは、とても子供の手が届く高さではありません。限られたスペースの中での苦しい努力だと思えば、無いよりましだと思わなければいけないのでしょうか。願わくば、もっともっと広いスペースと明るい部屋であったならばと夢みています。

子供は本の貸出しを受けるだけでなく、放課後の解放されたひとときを図書室でゆっくりと本の世界に遊んでいるわけです。そんな子供達を見ていると、心から楽しそうな様子が分かります。

今は、小さな小さな母と子の図書室ですが、近い将来、川津の子供達のために明るい、広い図書室の実現を願いながら、本と子供の出合いを大切にお手伝いさせて頂いております。

＊あとがき＊

昨秋、「読書週間」にちなんで「読書体験記」を募集しましたところ、多数のご応募を戴き厚くお礼申し上げます。そのうちの一編を掲載させていただきました。他の入選作品は「島根読進協第12号」に掲載させていただきました。

――子供読書講演会要旨――

心を育てる読書

佐藤英和氏

1．聞く耳を育てる

人間がひとりで本を読むようになる基本的な道すじを考えてみる時、幼児と絵本との出会いが極めて重要な意義をもっています。

子どもと絵本との出会いは〝読んでもらうこと〟から始まります。子どもにとっては〝聞くこと〟です。耳から快いことばを聞くことによって幼児はことばを収得し、ことばの力を伸ばし、絵本の絵と自分の体験を結んで絵本を楽しむようになります。本を読むために一番大事なことは字が読めることだ、と文字学習と結びつけて考える人が多いようですが、それ以前に「聞く耳が育つ」ことがことばの第一歩です。聞く力がついたら話すことも徐々にできるようになります。

2．絵を読む――絵はことば

聞くこと、話すことができるようになると、その次は絵を読むようになります。幼児にとって絵はことばです。文字は全く読めなくても絵本を開いて「ブーブー」「ワンワン」と読みます。これは子供が絵をことばとして読みとっているからです。やがて紙とクレヨンを与えるとわけのわからない絵をかく、これはことばを書いているのです。

3．〝人格をもったことば〟で語る

カセット付きの絵本が売り出され、朗読のうまい人が読んでいます。「ああ、いいものができた」と喜ぶ親がいますがこれはまちがいです。

読み聞かせは、生きている人間が、生きている子供に、生きている肉声で目を見て語りかけてやることです。肉声で語ると子供はじっと目を見て聞くし、問いかけたら答えてやることもできます。つまり、ことばを通して人格的なかかわりを持つことができるのです。現在、テレビの影響で人格をもたないことばが氾濫しています。最近の子供たちが目を見て聞かなくなった、話さなくなった、ことばの力が弱くなった、など聞くにつけ、人格をもった肉声で語りかけることの重要さを感じます。

4．「心を育てる」ということ

お話を一生懸命聞くうちに、子供の柔軟な心はすっかり主人公に同化して、共に喜び共に悲しみ、どきどきはらはらと躍動します。こうした内的な感動、内側からこみあげてくる喜びや悲しみ、これが本当に心を育てることだと思います。体も運動しなければ発達しないように心も躍動させなければ豊かに育つことはできません。本を読むこと、お話を聞くことの一番大切な意義がここにあります。そして子供たちの心をとらえて離さない絵本や読物が子供の文化といえます。

ところが今、子供の心をとらえて離さないものにテレビやマンガ、ゲームなどがあります。これも子供の文化といえるでしょうか。読書による感動と質的に同じでしょうか。私達は子供のきげんをとる時〝くすぐる〟ことをします。今子供をとりまくものの中には、子供の嗜好にあわせ媚びるものや外的な刺激によって子供の心をくすぐるようなものがはびこっています。読書が内面的な心の感動であるのに対して、これは外的な刺激による受身の楽しさで質的に異なっています。

私たち大人は、子供の文化に対する大きな分かれめとしてこの〝質のよさ、質の悪さ〟という尺度を明確に認識して子供の文化を守ってやらねばなりません。

子供の本のベストセラーは、時の試練を経て長い間読み継がれた本で質的に高いものをもっています。そういう本を読み聞かせることによって子供の心は質的に深まり、質のよさを見分ける力がついてきます。子供と本を結びつける人の質的な使命感がそこにあります。松岡享子さんがこう言っています。「子供の中には、よいものに手をのばそうとする力がある。よい本の中には子供たちに訴えかける力がある。その力と力が出会った時、子供たちの心の中ですばらしいことがおきる」と。力と力を信じて幼い時代にそれを出会わせる役割を担っていただきたいと思います。

S59年11月29日

於　島根県立図書館

昭和59年度 受賞作品紹介 よんでみませんか！

光抱く友よ

高樹のぶ子著
新潮社　880円

家庭環境が極端に異なる女子高校生勝美と、ある事件から急速に親しくなることによって、思春期から一歩大人の世界に踏み込んで行く淳子、彼女の急激な心の動きと変化を巧みに描いた小説である。

淳子は、父親が大学の先生をしているごく普通の真面目な高校生である。勝美は、飲み屋をしているアル中の母親を抱えて、学校は休む、男遊びはするという札付きの不良少女である。泥沼のような生活の中で、これだけはと意地のようになって守っている勝美の何かに惹かれながら、どろどろとした壮絶な人生の中にも光る何かがあることを感じ取った淳子が、新しい人間観に目覚めて行くところが非常に新鮮である。

（芥川賞受賞）

隅田川暮色

芝木好子著
文藝春秋社　1,500円

東京の下町を背景に、古紐の復元に情熱を注ぐ組紐の老舗の一族、それらをとりまく人々の綾なす人間模様を描く。主人公冴子が幼馴染みの紺屋の俊男親子を隅田川付近の家へ何年ぶりに訪ねることから物語が展開する。病弱な冴子をかばってくれた俊男、妻子がありながら冴子をさらうように北陸へかけ落ちする老舗の息子悠、母親同然の慕情を抱く甥響一。そして空襲の際、隅田川で不明となった最愛の男性（父）。冴子をとりまく複雑な人間関係を、作者の深い洞察力と綿密な構成で巧みに色わけして、みごとな広がりをみせて読者を魅了する。失われてゆく下町への限りない哀惜の情（おもい）が美しい施律として流れる中で、激しく燃えさかる男と女の情念が、端正な文章で綴られている。　（日本文学大賞受賞）

柔らかい個人主義の誕生

山崎正和著
中央公論社　1,100円

折り目正しい文体で書かれた本ではあるが、その表現に似ず刺激的な内容をもっている。今、進行しつつある「脱工業化」の波の行く末を人間の精神史的な側面から整理し、次なる「消費社会」への動向を是とし、この環境への人間の適応が可能であると主張する。消費社会における消費は、時間の消耗のための消費となり、手段を限定されない柔らかい自我をもつ個人が主流となるとする。この難題といわれる未来予測に類する分野を厳密にしかも楽観的に推論する。

賢明なる読者は、きっとこれを読むことにより、さまざまな示唆を受け、また逆に与えられた仮定をつき崩す努力を試みるに違いない。

（吉野作造賞受賞）

三界の家

林　京子著
新潮社　1,100円

著者は、父の仕事の関係で14歳まで上海で育ったが、戦争の勃発に伴い、長崎へ引き揚げた。そして昭和20年8月9日、長崎で被爆して以来、いつも死の恐怖と向かいあって生きてきた。しかし、その恐怖は子どもの誕生を機に、生き延びるための闘いへと変わっていた。それから20年、子どもの自立、離婚を経て、孤独と解放感に身を委ねるようになった著者は、旅を思い立つ。

この本は、旅に出た著者の折々の心境とか、父の死にまつわるいろいろな思い出を綴った短篇集である。

処女作「祭りの場」で芥川賞を受賞してから、作者は一貫して被爆体験を後世に伝えることを使命としてきた。その作者がこれからどんな生き方をしようとするのか、興味を持たせる。

（川端康成文学賞受賞）

てんのじ村

難波利三著
実業の日本社　1,200円

この物語の主人公花田シゲルは、鳥取県米子生まれの元国鉄マン。21才の時、遊びに来た大阪で、ドジョウすくいを人前で演じ、芸人の道に入った漫才師である。大阪市西成区山王町の通称「てんのじ村」と呼称される芸人横丁に住みついて、多種多様な芸人達と共に生きた60余年の人生を、きめ細く、人情豊かに描いた作品である。

全編を流れるほろ苦い涙の中、ひたむきな芸人村の人々が活き活きと暖かく表現されている。特に下積みばかりで、一時は芸を捨てようとまで思ったシゲルが、84才にして始めてテレビ出演するところなど、人生一度は花咲く時もあるとほっとさせられる。

著者は島根県温泉津町出身で、社会の片隅で地道に根気強く生きる人物を味わい深く描く作家である。「イルティシュ号の来た日」「車夫一代」「天を突く喇叭」など郷土島根を舞台にした作品がある。

（直木賞受賞）

昭和59年度利用状況　よく読まれた本

県立図書館では直接、図書館に来て個人貸出をする館内奉仕と県下の市町村教委や県内公共図書館やその他団体等に貸出しする館外奉仕があります。館内奉仕では月平均約15,000冊の本が利用されています。館外奉仕では現在約82,800冊の本が貸出しされています。昭和59年度中によく利用された本を館内奉仕のカウンター別と館外奉仕とに分けて紹介します。

〈館内奉仕〉

中央カウンター　（一般成人・学生用）

読みものではテレビ、映画化された文芸大作がよく読まれました。なかでも宮尾登美子著「序の舞」、山崎豊子著「二つの祖国」、松本清張著「迷走地図」、渡辺淳一著「化粧」は、年間を通じてほぼ切れめなく、よく貸出しされた作品です。他には瀬戸内晴美著「こころ」、吉川英治著「宮本武蔵」などがよく読まれました。赤川次郎の本は、新作、旧作の区別なく、いつも引っ張りだこです。

読みもの以外では、例えば哲学書は普段あまり貸出しが多くないのですが、浅田彰著の「逃走論」「構造と力」が大人気だったこと、障害児問題を扱った「クシュラの奇跡」、「愛、みつけた」、大韓航空機事件を柳田邦男が論じた「撃墜」など、比較的硬い本もよく読まれ、マスコミによる情報に読者が敏感に反応して、本を求める姿勢にあらわれているようです。

子ども室　（幼児・小学生用）

貸出数の多かった分類のベスト3は①文学　②絵本　③自然科学です。特によく読まれた本を分類別に紹介します。

①文学　小学校低・中学年用では「ちいさいモモちゃん」「エルマーのぼうけん」「はらぺこおなべ」等の普遍的なもの、新刊では「ゆきおと木まもりオオカミ」「まちがいパンツ」「ぽっぺん先生のどうぶつ日記」に人気がありました。又、〝いじめっ子〟をテーマにした「へんしんスグナクマン」「こんにちはバネッサ」がよく読まれたというのも今年の特徴でしょう。

②絵本　絵本は回転率が一番高い分野です。そして利用者は、年々低年齢化していきます。人気のあるのは「ぐりとぐら」「ちびくろさんぼ」「かにむかし」等です。新刊では、〝14ひきシリーズ〟「くんちゃんとにじ」がひときわ目立っていました。

③自然科学　動物、植物、星座関係の本は夏休み中に限らず、コンスタントに読まれています。「科学のアルバム」「カラー自然シリーズ」は毎年人気があるシリーズです。

郷土資料室　（島根県関係資料）

去年は1月に岡田山古墳出土の鉄剣文字解読、7月に荒神谷遺跡の銅剣発掘と、考古学の大きな話題が二つもありました。それに触発されて、周辺の遺跡に興味を持つ人が増え、その関係の資料の要求が多くなりました。

夏休みには、学校の宿題で、「中海・宍道湖淡水化問題」「高瀬川」「大梶七兵衛」「各地の祭り歳時記」「地名の由来」「都市計画」等、身近な郷土の問題をテーマにする人も多く、盛況でした。

「中海・宍道湖問題」のような現在の生活に関係の深い県・市町村の行政資料は、当館も収集に努めています。なかなか要求に応じきれていない現状です。又、提供する資料の中で、古い時代の資料は、文字や文章が若い人には読みにくいこともあり、誰にも読めるやさしい郷土資料の発行が待たれます。

その他、地図類、経済情報、同人雑誌等もよく利用され、継続出版物は次号を待ちかねている人もある状況です。

〈館外奉仕〉

貸出冊数を分類別にみると、児童本（貸出冊数の47%）と次いで文学書（35%）が最も多く、残り18%が他の分類です。

児童本の貸出数は年々増加しており、これはやはり、親子読書活動の普及・定着のあらわれではないかと思われます。現に今年度、団体貸出（100冊以内3ケ月以内）において、市内のほとんどの幼稚園での貸出しがありました。又、子ども読書活動が、今年度から実施され、モデル市町村に文庫用図書として、50冊を単位に貸出しをはじめました。子ども読書会用図書（15冊1セット）も毎月、各グループに貸出しています。その中で親子読書の延長として、絵本や低学年向きの楽しい本が喜ばれました。

文学書は、自動車文庫用と成人読書会用で多く貸出しされました。現在、成人読書会用図書（1セット15冊）239セットあるうち、山口玲子著「女優貞奴」、大佛次郎著「小説日蓮」、田辺聖子著「風をください」宇野千代著「生きて行く私上・下」、三浦綾子著「水なき雲」に人気がありました。読書会メンバーに女性が多いせいか、やはり女流作家の作品やテレビ化された作品に人気があります。時代を反映して小説以外で高原須美子著「女は三度老いを生きる」もよく利用されました。

わが町の自動車巡回④　旭町教育委員会

旭町における巡回図書貸出しは、昭和53年から段ボール箱に詰めた図書をライトバンに載せて、町内5ケ所の巡回貸出しからはじめました。

現在は図書専用自動車に約1500冊を載せて、月1回～2回1日11ケ所を巡回しています。1ケ所の停車時間は10分から40分程度です。

朝8時35分役場前を出発進行!!「今日の利用状況はどうかな。今日もたくさんの人に出会いたいな」とわくわくしながら、5分間走ってトンネルを抜けると、そこは最初の停車場、縫製工場前、縫製の仕事の手を休め車に乗り込んできて「おはようございます」「いらっしゃいませ」の挨拶もお互いに上機嫌。

小学校の前で停車、車めがけて一目散でやってくる子ども達。自分の好みの本を見つけて大喜びの子、先をこされてガッカリする子、いつまでも本を見つけられない子等、車の中はまるで蜂の巣をつついたようなにぎやかさです。始業時のベルの合図で一目散に教室へ。ここで我々はホッと一息。

午前中5ケ所を巡り、12時に昼食のため帰庁、そして午後1時再び出発します。この巡回貸出しもすでに8年目となり利用者の方とも親しくなり、「今度の巡回の時に○○の本を持ってきて欲しい」「○○の本を読みたいが購入してもらえないか」などの希望も聞かれるようになり喜んでいます。又、地域によって好まれる図書もほぼ理解できるようになり、車に積み込む際、午前中と午後と別にする手立ても講じています。

58年度、島根県教育委員会から、読書普及モデル町に指定していただき、中でも全保育所を対象にしての親子読書活動を重点事業としてとりくんでいますが、この親子読書の目に見えない効果も出てきつつあるように感じています。入所児のお母さんから入所していないお母さんへの口伝えによるものか、入所していない子どもの手をひいて、親子一緒に、おばあちゃんと一緒に絵本を借りて帰られる光景もずいぶん多くなってきました。

悩みのタネは、冬期間の雪です。巡回を計画していても、雪のため急に中止しなければならないこともしばしばです。11月末の巡回の時から「雪のため、長い間巡回できないこともありますから、たくさん借りて下さい」といってすすめています。12月から2月末頃までは天気予報と相談しながらの巡回です。

今後、この自動車を心待ちにしている皆さんの期待に添えるよう、たくさんの本と共に出かけていきたいと思っています。

NEWS

西部読書普及センター（仮称）起工式

去る1月9日、浜田市長沢町の建設予定地において、島根県立石見教育センター（仮称）の起工式が行われた。教育センター内には当館の西部読書普及センターが併置されることになっており、61年4月オープンをめざして工事に着手した。起工式には県教委・学校教育課・教育センターの関係者をはじめ当館からも次長が出席した。

市町村読書普及研修会開催

宍道町の中央公民館と益田市立図書館の二会場で2月4日と6日に市町村読書普及研修会が開かれた。

初めに54年度から実施されている親子読書活動の状況と今年度からとり組んだ子供読書活動についてモデル町村からそれぞれ工夫されたユニークな活動が発表された。その後、質議応答があり、最終的には指導員の確保と指導員による推進力が大であることを確認した。

昭和60年度　各種講座募集！

毎年、文化事業の1つとして各種講座を募集しています。60年度は次の6講座を募集します。

○出雲国風土記を読む会　毎月第2金曜日　午後1時～3時　講師　県立図書館主査　藤岡大拙
○古文書を読む会（入門）毎月第1土曜日　午後1時30分～3時30分　講師　桜木　保
○古文書を読む会（上級）毎月第3土曜日　午後1時30分～3時30分　講師　県立図書館主査　藤岡大拙
○万葉集を読む会　毎月第2木曜日　午後2時～4時　講師　島根大学名誉教授　小原幹雄
○親子で絵本を読む会　毎週水曜日　午後3時～4時
○図書館読書教室　毎月第2火曜　午後1時～3時

住所・氏名・受講講座名をハガキか電話で申込み下さい。〒690 松江市内中原町52　県立図書館普及係まで　TEL　0852－22－5730